武蔵野日曜聖書講筵

天の宝
――マタイ伝第6章19～24節――

１９９３年９月12日
小池辰雄

安息日の歌　どん底的存在　無即無限無量　キリスト神交　キリストという天宝を内に宿す
目で聴き耳で見る　神眼　活ける宝　キリスト告白

【マタイ6】

19なんじら己がために財宝を地に積むな、ここは虫と錆とが損い、盗人うがちて盗むなり。20なんじら己がために財宝を天に積め、かしこは虫と錆が損わず、盗人うがちて盗まぬなり。21なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし。22身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。23然れど、なんじの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。24人は二人の主に兼事うること能わず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼事うること能わず。

●安息日の歌

最初に、私が昨日作った、「安息日」の讃美歌を歌わせてもらいます。讃美歌121番の「馬槽の中に」の歌調で歌えます。

「安息日」（召団讃歌Ａ58）

（１９９３年９月11日作、讃美歌121「馬槽の中に」の曲で）

1　いずれの里も　住めば都
立ち去りがたき　わが家なるぞ
主イエスにありて　生くる恵福を
たぐいもあらぬ　パラダイスなり

2　七日目ごとに　めぐり来たる
安息日の　オアシスにて
主イエスの力　臨みきたり
まことにうれし　主と一つなり

3　主の日を守り　讃美歌うたい

友らと共に　　み名をたたえ
生命の源の　　主に祈れば
み霊の力　　臨み来たるぞ

●どん底的存在

コリント前書9章19節に、

「われ凡ての人に対して自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隷となれり。」（コリント前9・19）

とある。パウロもやはり、どん底に立った。

「凡ての人の奴隷となった」

という。どん底に立って、それを持ち上げて救い上げる。パウロのどん底的な気持がここに表われている。

私はこの夏に或る本を読んでいて、非常に打たれた。それで、

「私もその人のようにどん底的存在でありたい、人の上に立つのは御免だ」

と思った。キリストがどん底に立ったひとです。キリスト者はどん底的な人間である。弱い人、病める人、能力のない人、いわゆる世の中のくずのような人、そのような人たちと同じレベルにキリストは立って、それをみな荷ない上げ、救い上げてしまった。人を救ったり助けたりするためには、同じどん底の次元に入らないとできない。上から、高い所から、人を救い上げるような態度ではダメだ。

私は止むを得ずしてあそこ（壇上）へ立つこともあるでしょうけれども、私の気持は皆さんと同じ所にこうやって坐って、お話をする。それですから、私は今日はここ（壇の下）でお話をさせていただくわけです。とにかく、これからは、どん底で行こうというわけであります。私の別名は「どん底」でいい。

●無即無限無量

皆さんとの安息日は、キリストの中に安らい、力を得る。安息日にはキリストの力をいただくので、ただ休むのではない。

「憂うる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。」（コリント後6・10）

やはり、どん底的な人間はそういう働きをする。パウロが正にそうです。

「自主の者なれど、奴隷となった」

という。その最たるひとはイエス・キリストです。キリストは地上を歩くときに、相手の人の次元に自分をおろして、そこから相手の人を救いあげてしまう。上から抬げるのではない。その人と同じ次元に立って、そして、それを抬げる。アトラスのように持ち上げる。

こういうのがどん底の力です。

「無即無限無量」

と言いますが、「無」という言葉は、表現でいうと、

「どん底」

ということです。私が無いということ、自分を立てないということは、キリストを立てることに、神を立てることになる。

だから、私無き世界は最も素晴らしい無限無量の世界に通ずる。それがどん底というものです。私がではない、キリストが為してくださる。

「主さま！」

と一言叫べば、直ちに主がやって来て、力となってくださる。それがこのどん底の現実です。

それは何かというと、

「十字架と聖霊」

です。十字架と聖霊は切り離してはいかん。本当に十字架を負う人には必ず聖霊の力がくる。

「聖霊、聖霊」

と言っていて、十字架がなければダメです。十字架と聖霊は不可分の関係で、

「無即無限無量ということが十字架・聖霊のこと」

です。そういうことをはっきり言う者がなかなかいない。片一方は「聖霊、聖霊」と言ってみたり、もう片一方は

「十字架、十字架」

と言っている。

十字架・聖霊は不可離の関係であります。それが無即無限無量ということです。こんなありがたいことはない。無力であることが無限力になる。

●キリスト神交

これは

「キリスト教、

ではない。教訓（おしえ）ではない。キリストそのものです。キリストが中へ入ってくださる。キリストと一つになる。さっきの讃美歌にも私は

「主と一つなり」

と書いた。

２　七日目ごとに　　めぐり来たる
　　安息日の　　オアシスにて
　　主イエスの力　　臨みきたり
　　まことにうれし　　主と一つなり

キリストと一つにならなければ、信仰なんて言ったってダメです。「しんこう」というのは、私は「信じ仰ぐ（信仰）」とは書かない。神の交わり

「神交」

と書く。神との交わりの世界に入らなければダメです。「しんこう」は神交、神交わりです。神交わりは具体的にはキリスト交わりです。キリストと一つになる。これが秘訣です。何が来ても、どうなっても、現実に支配されない。「しんこう」は信じ交わる「信交」よりも神との交わり「神交」と書く。

本当の「しんこう」は神交わりである。そういった神秘的な境地は中世のエックハルトがもっていた。エックハルトというのは凄いひとです。

コリント前書9章19節とコリント後書6章10節の所が無一物無尽蔵の世界です。

「憂うる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。」（コリント後6・10）

「何も有たぬ者の如くなれども」

とは

「何も無いけれども」

ということです。パウロの言い方は少しまだるっこい。

「何も無いけれども、一切を持っている」

ということです。キリストは宿も持っていない。人の所へ行って泊まっている。キリストは何も無い。裸足で歩いている。何ものも無いキリストは一切のものを持っている。全てのものを救いあげていく。神の力が来ているから、神と一つだから。

我々は、

「キリスト神交」

でなければダメです。もう私は「信仰」とは書かない。そんなまだるっこい二段構えな世界ではダメだ。もったいぶったような信仰ではない。信じ仰いでいたら、いつまでたってもダメだ。そういう旧態を突破しなければダメです。普通のクリスチャンはもったいぶってやっているが、ご苦労さんだよ、くたびれてしまう。私の現実はくたびれない、楽しい。

●キリストという天宝を内に宿す

それではマタイ伝6章に入ります。今日の主題は「天の宝」という。マタイ伝6章19節から24節までです。

19なんじら己がために財宝を地に積むな、ここは虫と錆とが損い、盗人う
がちて盗むなり。

まったくその通りです。キリストの言を私は新しく読み直すと、まったく凄いよ。大変な言だ、実力の裏づけのある言だから。キリストの言は単なる言葉ではない。現実なんです。

20 **なんじら己がために財宝(たから)を天に積め、かしこは虫と錆が損わず、盗人うがちて盗まぬなり。**

「宝を天に積め」

とはいったい何のことか。

「キリストという天体(てんのからだ)と交わっていると、自(おの)ずから宝が天に積める」

ということ。「宝を天に積め」と書いてあるけれども、「宝を天に積む」ことが自然の結果となる。目的ではない。自然にそうなる。問題は「宝を天に積む」のではなくて、

「キリストという天的な天宝を内に宿せ」

ということ。そうすれば、それがもう既に天国だから。地上に於て既に天国を現じている。

キリストは地上で歩いているときに、天国を体現しながら歩いていた。

「天国は近づけり」

ではない、

「天国はわが周囲にあり。私が天国体だから」

と。すべて一如の世界です。一如の世界が神交の世界です。

「キリストを宿して、天的な行為をしていろ。そうすると、自ずから天に宝を積むことになる」

ということです。

●目で聴き耳で見る

イエスの聖言の奥を読まなければダメです。言葉にとらわれたらダメ。

「この言葉の現実は、本当の根源はどういう現実か」

ということを洞察しなければ。目で聴くんです。字を見ながら、キリストの言を聴く。目で聴き、耳で読む、耳で見る。

「目で聴き、耳で見る」

というような現実にならなければダメなんです。

あなた方は私の話を聞いているけれども、耳で聞いていてはダメです、耳で見てなければ。

「その言葉の現実は何であるか」

ということが見えてなくては。耳で見、目で聞く。聖書を読んでいるときには、文字の奥から響きが聞こえてこなければダメです。目でまだ見ているだけではダメなんです、キリストの言が現実に聞こえてこなければ。

「汝ら己が宝を天に積め」

という言葉を、

「ああそうですか」

なんて頭で読んでいたらダメです。

集会というものは聞いている世界だから、聞いて受けとる世界だから、分かる世界ではない。体受する、身体で受けとる世界です。

21 **なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし。**

そういう天の宝、天宝がある所には心がそこに生き生きとしてくる。そして、天の宝は光っている、光を持っている。

●神眼

22 **身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。**

「身体の灯火は目が灯火だ」

という。それはそうでしょう。しかしながら、目が灯火であるためには、心眼がなければダメです。心眼が奥になければ、目が目でない。ということは、神眼がそこに来てなければダメです、神・キリストの眼が。

「神・キリストの眼で見ろ」

ということです。心の眼から、今度は神の眼になる。それが本当の根源の現実です。私は霊的な現実にいるから、見えてくる。心の眼の元は神の眼、神眼である。

「身の灯火」

は本当は、神・キリストを宿すと、神光或いは神灯です。

「汝の目ただしくば」

の「ただしくば」という言葉は

「単純率直」

なことで、ギリシア語では「ハプルース」という字で、単純無雑な世界をいいます。

「汝の目が単純であるならば全身が明るい」

ということです。或る一点を凝視して、他のことを左顧右眄しない。それが単純なことです。

23 **然れど、なんじの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。**

「なんじの目あしくば」

とはもちろん慾心があることです。「目が悪い」ということは、欲の心があれば、これは「目が悪い」、欲で見ている。

「あれをひとつ盗ってやろう」

とかね。本当の芸術家は美を美として見る。美わしきものにおいて他の心を起こさない。芸術家は女性の裸体をよく描く。神さまの大傑作は女体だから、それを美を美として描く。

欲心がからみついていると、全身が暗くなる。心に光がない、闇だ。

●活ける宝

24人は二人の主に兼事うること能わず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼事うること能わず。

師匠は一人だ、

「あっちの先生、こっちの先生」

なんてゴタゴタするな、ということ。比較研究なんかやっていると分裂してしまう。

「こっちの先生はこうだが、あっちの先生はああだなんて、そんな下らないことはよせ」

ということ。

「汝ら神と富とに兼事うること能わず」

「富」とは「マンモン」です、ギリシア語では「マンモーナース」という。これはルカ伝16章13節にも出ている。「富」をもって代表されるこの世のものは全部、「偶像」だ。

「神か、偶像か」

ということです。

我々は神・キリストに親しむ。これは活ける宝ですから。活ける宝と交わっていれば、自ずから

「宝を天に積む」

ことになる。「宝を天に積む」ことを特別に目的に考えなくてもいい。自然に積んでしまう。そこはもう天国だから。

「恵福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人の有なり」

とはそのことです。「霊の貧しい」とは「どん底」で、

「霊がどん底で何もない。そうすると、キリストという天国がその人の中に入ってくる」

ということ。キリストは自分の体験をそのまま言ってらっしゃるんだ。

●キリスト告白

「キリスト教」

ではない。

「キリスト告白」

です。全部、告白です。「教」なんて言うからおかしなことになる。

「そうか、その教えは守らなくてはいかんか」

なんて、そんなことで福音がつかめるかというんだ、冗談じゃない。キリストの言は全部、告白です。教えているのではない。止むにやまれずして語っている。パウロも

「止むを得ざるなり」

と言って、福音を止むにやまれずして語っている。「アナンケー」という語です。

「告白しなければいられない」

ということ。

それだけ言うと、もう問題がなくなってしまった。私はこの頃、簡単になってしまったものだから、余計なことはあまりしゃべれなくなってしまった。

それが

「宝を天に積め」

ということです。

「『宝を天に積む』とはどういうことですか？」

なんて一生懸命で頭で考える。ダメだよ、頭で考えていたら。

「キリストと交われ、キリストという宝をうちに宿せ。そうすれば自ずから宝が天に積まれるぞ」

ということです。何だって、キリスト中心ですから、キリスト抜きに考えたらダメです。キリストも十字架と聖霊、十字架と聖霊のキリストです。

十字架は無、聖霊は無限無量。だから、

「無即無限無量は十字架即聖霊の世界」

です。これをバラバラにしたらダメなんです。そういうキリストという生きた宝のある所には我々の心も自然にそこにあらざるを得ない。

目が単純率直であるならば全身が明るい。欲心があればダメだ、

「汝の内の光」

とは汝の内なるキリストの光ということ。そして、24節が大事です。

24人は二人の主に兼事うること能わず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼事うること能わず。

「神か、富か」

と。「富」というのはこの世のものということ。

「天国か、地獄か。天国か、現世か」

ということです。人間の現世そのものは滅びに向かっている。だから、いつまでたっても世界中、問題が絶えない。そしてだんだん滅びていく。

「盛者必滅、会者常離」

という。